

図書館だより

令和6年1月26日発行

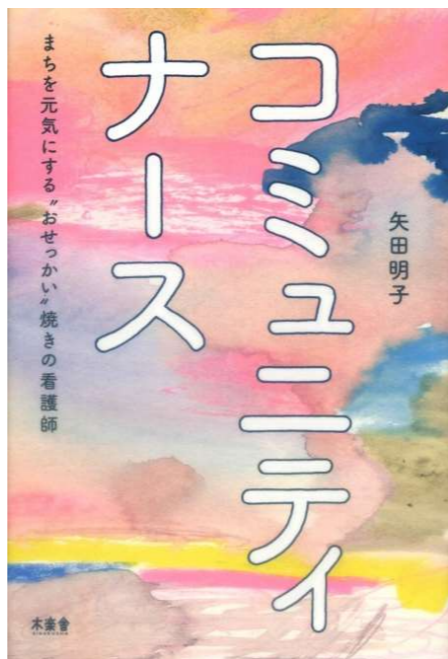
新着図書を紹介

●『コミュニティナース まちを元気にする “おせっかい” 焼きの看護師』 矢田 明子/著 木楽舎

コミュニティナースとは、病気やけが、障がいなどを抱える人や家族に対し、病院の中ではなく、地域や暮らしの中で看護の支援をする看護師のことだ。その活動範囲は広く、形態も様々だ。看護師のいるカフェを開いた人、子育てサロンを始めた人、訪問看護ステーションを立ち上げた人、「地域おこし協力隊」として「集落支援員」になった人など。

体や心に不調を感じた時、身近に看護師などの医療知識がある人がいて、気軽に相談できたら、重症化を防げたり、早期治療によって命が助かったりすることもあるだろう。健康に対する意識も向上するかもしれない。

著者は父親を癌で亡くしたことをきっかけに、26歳で看護師を目指し、3人の子どもを育てながらアルバイトで学費を貯め、予備校に通い、短大に入学する。そしてすぐに、海外で行われていた「コミュニティナース」を知る。入学した翌月には「コミュニティナース見習い」と名刺に書き、活動を始めた。さりげない“おせっかい”の焼き方も学べるノンフィクション。



●『杉森くんを殺すには』 長谷川 まりる/著 くもん出版

高校一年生の「ヒロ」は、義兄の「ミトさん」に電話して「杉森くんを殺すことにしたの」と告げる。ミトさんは「今のうちにやり残したことをやり、その後、裁判所で説明するために、杉森くんを殺す理由をまとめておくように」とアドバイスする。

ヒロは豚の貯金箱を床に叩きつけて割り、マンガ本を「大人買い」し、同級生と遊園地で遊ぶ。そして、杉森くんを殺す理由を15個書き出す。

杉森くんを殺す理由を考えるうちに、ヒロは自分の内面とも向き合うことになる。自分でも気づかずに押さえていた感情が溢れ出す。

リストを作ることで、やりたいことや悩みの形がはっきりしてくると著者は言う。好きなもの、嫌いなもの、休み中にやりたいこと、難しくわからない勉強、見たいアニメなど、リストを作ることで、自分の心の奥のもう一人の自分に出会えるかもしれない。



●『なれのはて』 加藤 シゲアキ/著 講談社

ある事件をきっかけに、報道局からイベント事業部に異動することになったテレビ局員・守谷京斗は、異動先で出会った吾妻李久美から相談を受ける。それは、祖母から譲り受けた作者不明の不思議な絵を使って「たった一枚の展覧会」を企画したいというものだった。

しかし、絵の裏には「ISAMU INOMATA」と署名があるだけで、画家の素性は一切わからない。二人が謎の画家の正体を探り始めると、秋田のある一族が暗い水の中に沈めた業に繋がっていた。

一枚の不思議な「絵」から始まる運命のミステリー。

●『なるにはBOOKS 大学学部調べ 心理学部 中高生のための学部選びガイド』 橋口 佐紀子/著 ペリかん社

心理学部といえば「卒業後はカウンセラーを目指す」というイメージがあるかもしれないが、心理学部で学んだことを活かせる仕事はカウンセラーだけではない。むしろ、カウンセラー以外の仕事に就いて心理学部での学びを活かしている人の方が多いのだ。

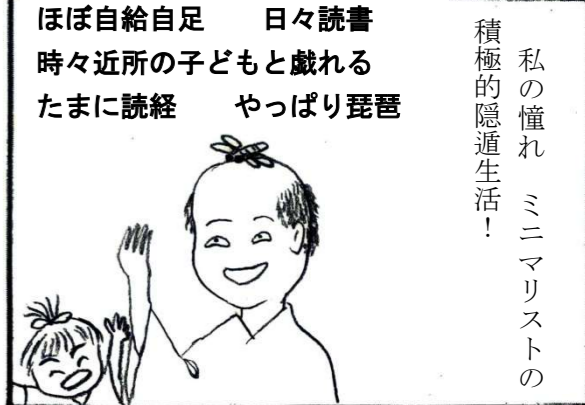


●『なるにはBOOKS 大学学部調べ 社会福祉学部 中高生のための学部選びガイド』 元木 裕/著 ペリかん社

福祉という言葉の「福」も「祉」も「しあわせ」を意味する。だから、福祉というのも「幸福」を指す。幸福になるため、お互いに助け合うことが福祉の基本理念だ。そして、そのためにどのようなことをすればいいのかを考えるのが社会福祉学の役割だ。

ある日図書館で

その15 鴨長明がヤバい 作・絵：内山 裕子（司書）



●『内気なキミを最強にする説明書 シャイという才能を活かすガイドブック』
ナディア・ファイナー/著 「子供の科学」編集部/編 誠文堂新光社



本書は、明るくて積極的で社交的な人になるための本ではない。内気という現状を認め、内気ゆえの生きづらさを軽減し、内気のまま、その能力を最大限発揮するための本である。

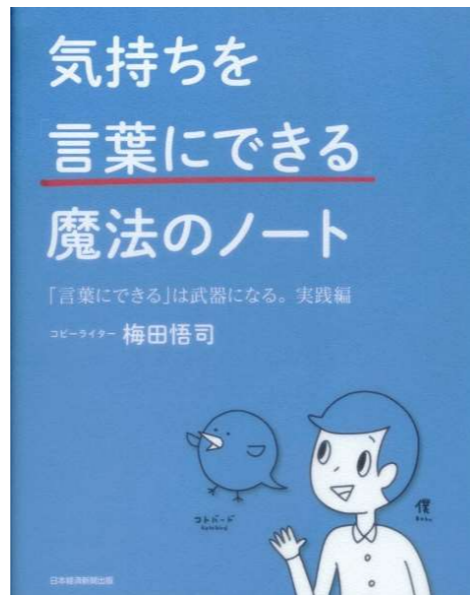
社会では一見、外交的な人が得をするように見えるが、実際は、内向的な人が大きな成功を収めている事例も少なくない。芸術家など創造性の高い仕事や、こつこつと地味な仕事を積み重ねる職人や研究職など、内気な人が活躍する場は多い。

本書には、難しい理論は一切なく、「友だちづきあいで困ったら」「挫折しそうになったら」など、様々な場面で具体的にどのように考え、行動したらいいのかを教えてくれる索引が付いている。より実践的な内容になっているので、友人や家族など身近に内気で困っている人がいるという人にもぜひ読んでもらいたい。

●『気持ちを「言葉にできる」魔法のノート』
梅田 悟司/著 日経BP、日本経済新聞出版

自分の考えや気持ちを相手にきちんと伝えることは、簡単そうで意外に難しい。好きな人に告白する時、大学受験や就職試験の面接でアピールする時、どういう言葉でどう表現したらいいのか悩む人は多い。そんな特別な場面だけでなく、もっと仲良くなりたいクラスメートや日頃感謝の言葉をなかなか言えない家族に対して、自分の気持ちをちゃんと伝えることができれば、もっと日常が心地良いものになるだろう。

本書では、内なる心的心声を言葉にする具体的な方法を分かりやすく教えてくれる。心の中を深掘りすることで自分の中の意外な自分に出会えるかもしれない。



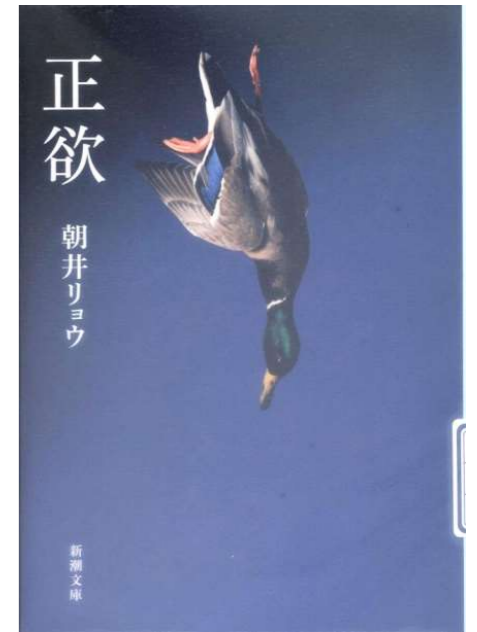
●『正欲』 朝井 リョウ/著 新潮文庫

ある日、神奈川県警など7県警の合同捜査本部は、男児のわいせつ画像を撮影したなどの容疑で佐々木、諸橋、矢田部の3人を逮捕・送検した。

いわゆる多様性とは「なんでもあり」ってことじゃない。「自分と違う存在を認めよう。他人と違う自分でも胸を張ろう。」などと言っている、人々は、想像を絶するほど理解しがたい、直視できないほど嫌悪感を抱き距離を置きたいと感じるものには、しっかりふたをするのだ。結局、マイノリティの中のマジョリティしか、“多様性”の恩恵を受けられない。

そんなマイノリティの中のマイノリティ同士が“繋がる”ことで、「明日も生きていたい」と思えるとしたら…これは希望の書でもある。

第34回柴田錬三郎賞受賞作品。

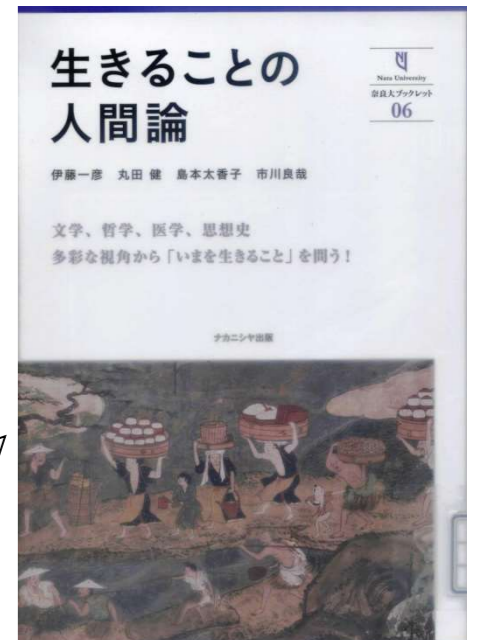


寄贈図書紹介



『「戦争への道」ではなく「平和への道」を進もう—神話の呪縛を解く—のお爺さんの子と孫への話』高橋 信敏/著 清風堂書店
多くの人命を失ってでも守らなければならないものとはいったい何なのか。戦争と平和を問う。

『奈良大ブックレット 06 生きることの人間論』
伊藤 一彦、丸田 健、島本 太香子、市川 良哉/著 ナカニシヤ出版
歌人、哲学者、産婦人科医、宗教学者による人間論。



●『夜明けのすべて』 瀬尾 まいこ/著 文春文庫

PMS（月経前症候群）で感情を抑えられず、ささいなことで他人にきつくあたってしまいがちな美紗。パニック障害になり、生きがいの気力も恋人も失った山添。二人はそれぞれ新卒で入社した会社を、その症状が原因で退職し、社員6人の小さな会社に転職した。

同じ会社で働く二人は友だちでも恋人でもないが、山添がパニック発作を起こしたのをきっかけに、同志のような気持ちが芽生える。自分の症状はどうすることもできないとしても、相手のことは助けられるかもしれないと思うようになる。

人生は苦しいだけじゃない。助け合って生きていけば、辛さを軽減することは可能なのだ。登場人物のほとんどが“いい人”ばかりの小説。ほっこりしたい人におすすめだ。



『〈わたし〉はどこにあるのか ガザニガ脳科学講義』
マイケル・S. ガザニガ/著 藤井 留美/訳 紀伊國屋書店
私たちは人間であって、脳ではない。

『動物に「心」は必要か 擬人主義に立ち向かう』
渡辺 茂/著 東京大学出版会
擬人主義の起源を探り、なにが問題であるかを明らかにする。

